

Title	7 : 2 0 1 9 年度東京歯科大学口腔がんセンターにおける初診患者の動向
Author(s)	山崎, 雅恵; 秋山, 友理恵; 平賀, 智豊; 栗原, 絹枝; 鈴木, 大貴; 齊藤, 寛一; 大金, 覚; 高野, 正行; 片倉, 朗; 高野, 伸夫; 野村, 武史
Journal	歯科学報, 120(4): 500-500
URL	http://hdl.handle.net/10130/5359
Right	
Description	

No.7 : 2019年度東京歯科大学口腔がんセンターにおける初診患者の動向

山崎雅恵¹⁾, 秋山友理恵¹⁾, 平賀智豊¹⁾, 栗原絹枝¹⁾, 鈴木大貴¹⁾²⁾, 齊藤寛一¹⁾²⁾, 大金 寛²⁾³⁾,
高野正行²⁾³⁾, 片倉 朗²⁾⁴⁾, 高野伸夫²⁾, 野村武史¹⁾²⁾ (東歯大・口腔腫瘍外科)¹⁾
(東歯大・口腔がんセンター)²⁾ (東歯大・口腔顎顔面外科)³⁾ (東歯大・口腔病態外科)⁴⁾

目的：東京歯科大学口腔がんセンター(Oral Cancer Center；以下OCC)は、2006年7月に開設された。東京歯科大学3病院の口腔がん治療拠点施設として、医科歯科連携のもと総合的な医療を提供し続け14年目を迎えた。今回、多様化する患者層と治療方針の把握を目的とし、2019度の患者動向を調査・検討したので報告する。

方法：2019年4月～2020年3月の1年間に、OCCを受診した初診患者を対象とした。受診経路、患者の内訳、背景、治療などの臨床情報を診療録から抽出し検討を行った。

結果：当該期間中の初診患者数は167例だった。平均年齢は70.9歳で年齢層は70歳代が29.7%、80歳代が17.8%と多かった。受診経路は、水道橋病院35例(21.0%)、千葉歯科医療センター36例(21.6%)、市川総合病院からの移行が39例(23.4%)、その他の医療機関からが57例(34.0%)だった。患者内訳は口腔癌患者が120例、転移性腫瘍や口腔潜在的悪性疾患など、その他の疾患が47例だった。口腔癌患

者のうち、一次症例が98例(58.7%)、二次症例が19例(15.8%)だった。一次症例の内訳はstage1が22例(21.8%)、stage2が26例(25.7%)、stage3が6例(5.9%)、stage4が21例(20.8%)だった。一次症例のうち、手術療法は77例(89.5%)、動注化学療法を含む放射線療法は9例(10.5%)で選択されていた。二次症例は局所再発が8例(42.1%)、頸部後発転移および頸部再発が9例(47.4%)、術後放射線治療依頼が2例(10.5%)だった。

考察：受診経路は、本学3病院からの紹介に加え、他施設からの紹介患者の割合が、過去5年間と比較して増加していた。千葉歯科医療センターの無床化に伴い、紹介患者数は増加傾向にあった。年齢層の中心は70歳代で、超高齢社会を背景とする後期高齢者の割合が増加していた。2019年度より全国でがん登録制度が開始され、今後罹患者数が蓄積されることから、当センターが担う責務が大きいことを再認識した。

No.8 : 筋腱接合部形態形成における Sox 9 の役割に関する組織形態学的検索

関谷紗世¹⁾, 山本将仁¹⁾, 北村 啓²⁾, 佐藤正樹³⁾, 阿部伸一¹⁾ (東歯大・解剖)¹⁾
(東歯大・組織・発生)²⁾ (東歯大・生物)³⁾

目的：「筋-腱-骨複合体」で構成される運動器は、身体運動と構造安定のために効率的に機能する。骨格筋・腱・骨格系は、それぞれ異なる経路で分化することが成書には記載されている。しかし最近の報告で、腱と骨格系は腱-骨格系前駆細胞群から各々の組織に分化することが示された。しかしながら、腱-骨格系前駆細胞群と筋原基という2つの細胞集団が如何にして運動器を組織構築していくのかを観察した報告はなく不明な点が残されている。そこで本研究では、腱-骨格系前駆細胞群と筋原基の結合過程を経時的に観察することにより、運動器を構成する複合体の組織構築機序を検索した。

方法：胎生10～16日のICRマウスを研究材料として用いた。観察対象部位を、上腕三頭筋の尺骨(軟骨内骨化)への付着部および外側翼突筋の関節突起(膜性骨化)への付着部とした。通法に従い関心領域周囲の組織塊を摘出・固定処理後、パラフィン包埋を行った。その後、パラフィン薄切切片を作製した。そして一部の試料を対象に、凍結切片を作製した。各切片には、抗Sox9抗体、抗desmin抗体を

用いて免疫組織化学的染色を施した。

成績および考察：胎生13日の上腕三頭筋の軟骨(尺骨)への付着部において、SRV-box9(Sox9)陽性の腱-骨格系前駆細胞群desminの集積する筋-腱接合部は接触していた。胎生14～16日になるとSox9は腱-軟骨接合部と軟骨に局限して発現した。一方で胎生13～14日の外側翼突筋の膜性骨(関節突起)への付着部においてもSox9陽性の腱-骨格系前駆細胞群desminの集積する筋-腱接合部領域は接していた。しかしながら、胎生15～16日において、腱-膜性骨接合部にはその発現は認められなかった。

今回の結果から、胎生期の腱-軟骨接合部にSox9の発現が残存するものは、将来の線維軟骨型の付着形態に分化し、腱-膜骨付着部にSox9の発現が減弱するものは線維型の付着形態に分化する可能性が示唆された。また発生初期の運動器は、どの部位においても腱-骨格系前駆細胞群と筋原基が接触するという同一の形態を示すことが確認できた。